

多摩図書館で所蔵する「装う」仕事の職業ガイド

『ファッションビジネス就職案内 先輩に聞く、先輩に学ぶ』
上田晶美、細田咲江著 織研新聞社 2007年

『人をきれいにしたい ファッション・デザイン・美容・フィットネス』
しごと応援団編著 理論社 (女の子のための仕事ガイド) 2006年

『モデルになるには』
松本慶子著 ぺりかん社 (なるにはbooks 82) 2000年

インフォメーション

「服装・身装文化（コスチューム）データベース」

URL <http://www.minpaku.ac.jp/database/mcd>

国立民族学博物館のホームページの中にあります。「衣服・アクセサリ データベース」と「身装文献データベース」の二つで構成されています。前者は、フリーワードで検索でき、該当する収蔵品の画像と標本番号、製作地域などが一覧できます。

国立民族学博物館 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話：06-6876-2151（代表）

キャリアデザイン 3

「装い」の仕事

人の体を装う衣装や化粧、装身具などに関する本を紹介します。

『ちぐはぐな身体』

鷲田清一著 筑摩書房 1995 (ちくまプリマーブックス)

人はなぜ、「服を着る」のか。服は身体を保護するためだけにあるのではない。そもそも、自分の「身体」とは何か？ 保護するためなら、なぜハイヒールやネクタイなど 廃れないのか？ 衣服や化粧を身体への加工とみなすと、なぜ、人はありのままの身体に満足できないのか？



東京都立多摩図書館

<http://www.library.metro.tokyo.jp/j>

平成21年5月

頭からつま先まで



『Miss Cabour(ミス カブール)の帽子の本』

鈴木和恵著 マーブルトン 2006年

帽子デザイナーの著者によるコーディネートと作り方の本。「ミス・カブール」は、著者が1999年に設立したレディース帽子のブランド。季節ごとの帽子、大人の帽子だけでなく、子供の帽子、帽子の種類の見解なども出ている。

『日本装身具史』

露木宏編・著 美術出版社 2008年

身体を別のモノ「装身具」で飾るのは、人間だけの行為。装身具を見れば人間がわかる。日本の旧石器時代の石輪から平成のティアラまでコンパクトに紹介されている。仏教が本格的に導入された飛鳥時代は、服装や宗教意識の変化にともない、装身具が消えた100年間だったということもわかる。巻末に装身具年表もあり。



『日本のファッション 明治・大正・昭和・平成 イラストでたどるおしゃれの歴史』

城一夫、渡辺直樹著 青幻舎 2007年

明治初期の鹿鳴館ドレスから平成のパンクスタイルまで、日本人のファッションの変遷をイラストでたどる。巻末に年代ごとの流行色、10年単位のファッション解説、年表も付いている。

『ズボンとスカート』

松本敏子文・写真 西山晶絵 福音館書店 1992年

世界のいろいろなズボンとスカート。スコットランドの「キルト」は男性のはくスカート。モンゴルの騎馬遊牧民は、昔からずっと女性もズボンをはいている。インドのサリーなどの着方もイラストで紹介。



『金メダルシューズの作り方 “世界のミムラ”が明かすシューズ職人の哲学』

三村仁司著 情報センター出版局 2001年

高橋尚子がシドニー・オリンピックで金メダルをとったときの靴を作ったのは、スポーツシューズメーカー・アシックスの技術部PSチーム。ここを統括する三村氏は、30数年、別注シューズ作製ひとすじの職人。選手の足を測定しただけで好不調までわかるという。高橋の他、瀬古利彦、有森裕子、谷口浩美、エゴロウ等の靴も作った。

究極の「装い」

『Hanae Mori style ハナエ モリ スタイル』

森英恵監修 吹田靖子編集 篠山紀信写真 与田弘志写真
講談社インターナショナル 2001年

日本から世界へ羽ばたいたデザイナー、森英恵。パリ・オートクチュール（注文服）業界に初めて迎えられた東洋人でもある。その華麗な世界を存分に見せる写真集。

